

漢語サ変動詞「入 N する」の意味と構文 —本動詞との関わりから—

張 善実

DOI: 10.18999/stul.34.113

1. はじめに

本研究では、本動詞との関わりから「入場する」や「入札する」のような「入 N する」の意味的・構文的特徴について考察し、「入 N する」には「入手類」、「入電類」、「入場類」、「入会類」、「入信類」、「入賞類」、「入札類」、「入金類」、「入庫類」の 9 つのタイプに分類できることを指摘する。

小林(2001、2004)は、「入(V)会(N)する」や「入(V)場(N)する」のような漢語サ変動詞(以下、V-N 型漢語動詞)が語外部にさらに項(N'P)を取る場合、その N'P は語内部の語構成と関わりと述べている。しかし、これらの研究では語内部の名詞的要素 N に重点が置かれており、動詞的要素 V にはほとんど言及されていない。そのため、どのような動詞がどのような N'P を取り得るかまで掘り下げて考察するには至っていない。それに対し、張(2011、2013a、2013c、2016、2017)では、V-N 型漢語動詞のうち、それぞれ「受 N する」、「除 N する」、「離 N する」、「着 N する」、「脱 N する」の意味的・構文的特徴を本動詞との関わりから考察しており、どのような動詞がどのような N'P を取り得るかについて論じている。

本研究は、張(2011、2013a、2013c、2016、2017)の延長線として、「入 N する」を分析対象とし、(i)「入 N する」の内部構成、(ii)「入 N する」の外部構成、(iii)N'P と N の意味関係の 3 つの側面から、「入 N する」が N'P を取るか否か、N'P を取る場合、どのような動詞がどのような N'P を取るかについて分析するものである。このうち、(i)「入 N する」の内部構成とは、「入 N する」の「入」と N がいかなる格関係で結合しているかについて言うものである。「入 N する」の「入」には「入る」という自動詞の意味で使われるものと、

「入れる」という他動詞の意味で使われるものの二通りがある。これには、Nが〈移動物〉を表す場合と〈離脱点〉を表す場合とがある。このように、「入Nする」の内部構成は表1に示したようにI類～IV類の4つのタイプに分けられる。

表1 「入Nする」の内部構成要素の結合パターン

「入」の意味	N〈移動物〉	N〈帰着点〉
入る(自)	I類:[Nが入る] (「入電する」)	II類:[Nに入る] (「入場する」) [Nに入る] (「入会する」) [Nに入る] (「入賞する」) [Nに入る] (「入信する」)
入れる(他)	III類:[Nを入れる] (「入札する」)	IV類:[Nに入れる] (「入手する」)

次に、(ii)外部構成について見る。「入 N する」には(1)の「入電する」や(2)の「入場する」、(3)の「入賞する」のように自動詞用法のものもあれば、(4)の「入札する」や(5)の「入手する」のように他動詞用法のものもあれば、(6)の「入金する」や(7)の「入庫する」のように自他両用法のものもある。

- (1) 交通事故の通報{が／*を}消防局に入電する。(自)
- (2) 選手たち{が／*を}競技場に入場する。(自)
- (3) a. 山田選手{が／*を}全国大会で三位に入賞する。(自)
b. 山田選手{が／*を}全国大会に入賞する。(自)
- (4) 海外企業が最高金額{*が／を}入札する。(他)
- (5) 記者が極秘情報{*が／を}入手する。(他)
- (6) 給料{が／を}入金する。(自／他)
- (7) バス{が／を}車庫に入庫する。(自／他)

続いて、これらの動詞の(i)内部構成と(ii)外部構成における自他性に注目すると、(8)-(14)のように、「入Nする」はいずれも外部構成における自他と「入Nする」の「入」の自他が一致する。このうち、(8)-(13)は下線部のように外部構成においてN'P(Nと同じ格)を取るのに対し、(14)は外部構成においてN'P(二格)を取らないという違いがある。

- (8) 交通事故の通報が入電する(自)…[電(信)が入る](自)
- (9) 選手たちが競技場に入場する(自)…[場に入る](自)
- (10)a. 山田選手が全国大会で三等賞に入賞する(自)…[賞に入る](自)
b. 山田選手が全国大会に入賞する(自)…[賞に入る](自)

- (11) 海外企業が最高金額を入札する(他)…[札を入れる](他)
(12) 給料{が／を} 入金する(自／他)…[金が入る／金を入れる](自／他)
(13) バス{が／を}車庫に入庫する。(自／他)…[(倉)庫に入る／(倉)庫に入れる](自／他)
(14) 記者が極秘情報を(*自分の手_に) 入手する(他)…[手_に 入れる](他)

最後に、「入 N する」は(ii)外部構成において N'P を取る場合、その N'P と N の意味関係には以下のような 2 つのタイプが見られる。一つは、(8')-(10'a) および(11')-(13') のような「下位語—上位語」の関係で、もう一つは、(10'b) のような「所属先—所属物」の関係である。

- (8') 交通事故の通報が 消防局に 入電する。
(下位語) (上位語)
- (9') 選手たちが 競技場に 入場する。
(下位語) (上位語)
- (10') a. 山田選手が 全国大会で 三等賞に 入賞する。
(下位語) (上位語)
- b. 山田選手が 全国大会に 入賞する。
(所属先) (所属物)
- (11') 海外企業が 最高金額を 入札する。
(下位語) (上位語)
- (12') 給料{が／を} 入金する。
(下位語) (上位語)
- (13') バス{が／を} 車庫に 入庫する。
(下位語) (上位語)

このように、「入 N する」は(i)内部構成、(ii)外部構成において複雑な様相を見せているが、この点については従来十分に論じられていない。そのため、本節ではこういった「入 N する」の意味的・構文的特徴について、内部構成、外部構成、および N'P と N の意味関係の 3 つの側面を中心に考察する。

2. 先行研究

「入 N する」に関する先行研究として野村(2002)が挙げられる。野村(2002)は「入 N する」の内部構成における造語パターンを以下の 7 つに分けている。

- ① N ガ V スル(≡ハイル)

入荷、入金、入電

② X ガ N ニ V スル 1(≒ハイル)

入館、入京、入庫、入港、入構、入国、入山、入室、入城、入場、入廷、入湯

③ X ガ N ニ V スル 2(≒ハイル)

入院、入営、入園、入会、入閣、入学、入局、入校、入獄、入社、入所、入隊
入村、入団、入朝、入党、入部、入門、入寮

④ X ガ N ニ V スル 3(≒ハイル)

入賞、入寂、入信、入神、入選、入道、入滅

⑤ X ガ N ニ V スル 4(≒ハイル)

入梅

⑥ X ガ N ニ V スル(≒イレル)

入館、入手、入籍

⑦ X1 ガ(X2 ニ)NヲVスル(≒イレル)

入荷、入鉢、入金、入稿、入魂、入札、入念

このように、野村(2002)は①～⑤の「入」はハイルの意味を表し、⑥⑦の「入」はイレルの意味を表すとしている。野村(2002)は、「入庫」を「②X ガ N ニ V スル 1(≒ハイル)」の一つの類だけとしている。しかし、この動詞は「車を車庫に入庫する」のように他動詞用法としても用いられるため、「入庫」の「入」はハイルの意味のほかにイレルの意味をも有する。そのため、本研究では「入庫する」の内部構成を見ると、「②X ガ N ニ V スル 1(≒ハイル)」の場合と「⑥X ガ N ニ V スル 4(≒イレル)」の場合の 2 つのパターンに分けて考察する。

3. 本動詞の意味

「入 N する」の意味的・構文的特徴について論じる前に本動詞の意味について概観する。「入 N する」は以下の 2 つの本動詞に対応する。

(A) 入る(自)

例: 入電する(電信が入る)、入場する(場に入る)、入賞する(賞に入る)

(B) 入れる(他)

例: 入稿する(原稿を入れる)、入棺する(棺に入れる)、入手する(手に入れる)

このうち、(A)「入る」は自動詞用法として用いられ、(B)「入れる」は他動詞用法として用い

られる。また、「入 N する」の中には、「入金する」(金が入る／金を入れる)や「入庫する」(倉庫に入る／倉庫に入れる)のように(A)と(B)の両方に対応するものもある。

以下、「入る」と「入れる」のそれぞれの意味について概観し、その中のどの意味と「入 N する」が対応するかについて見る。

まず、自動詞「入る」について見る。「入る」の意味は大きく以下の 8 つにまとめられる。このうち、「入 N する」と対応するのは①、②、③、④、⑤である。

(A) 本動詞「入る」の意味:

- ① 外部からある場所の内部へ移動する。
「教師が教室に入る」「電車がホームに入る」「法廷に入る」「風呂に入る」
- ② ある場所や物の中に収まる。
「冷蔵庫にビールが入っている」「甲子園球場には 6 万人が入る」「鞆に入る」
- ③ ある範囲や分類に収まる。
「予選で 4 位に入る」「日本全土が暴風域に入る」「蛇は爬虫類に入る」
- ④ ある集団や組織に属する。
「製造会社に入る」「言語学会に入る」「野球部に入る」「塾に入る」
- ⑤ 金や物、知らせなどが届く。
「口座に給料が入る」「店に新米が入る」「テレビ局にトップニュースが入る」
- ⑥ 設備が働き出す。
「研究室の暖房が入る」「パソコンの電源が入る」「機械のスイッチが入る」
- ⑦ 物事が進行して、ある状態になる。
「作業が最終段階に入る」「両国が交渉に入る」「明日から 12 月に入る」
- ⑧ ある場所に模様などが加えられたり新たに出来たりする。
「ドレスに模様が入っている」「ノートに下線が入る」「茶碗にひびが入っている」

次に、他動詞「入れる」の意味について見る。「入れる」の意味は大きく以下の 7 つにまとめることができる。このうち、「入 N する」に対応するのは①、②、⑥である。

(B) 本動詞「入れる」の意味:

- ① 外部からある場所の内部へ移動させる。
「客を部屋に入れる」「車を車庫に入れる」「魔法瓶にお湯を入れる」
- ② ある場所や物の内部に収める。
「ビールを冷蔵庫に入れる」「布団を押入れに入れる」「本を鞆に入れる」

- ③ ある集団・組織・分類に属させる。
「息子を一流企業に入れる」「後輩を野球部に入れる」「トマトを野菜類に入れる」
- ④ 金や物、知らせなどをある場所に届ける。
「家賃を指定口座に入れる」「店に新米を入れる」「親に電話を入れる」
- ⑤ 設備を働かせる。
「研究室の暖房を入れる」「テレビの電源を入れる」「機械のスイッチを入れる」
- ⑥ ある場所に模様などを加えたり、書き込んだりする。
「ドレスに模様を入れる」「ノートに下線を入れる」「茶碗にひびを入れる」
- ⑦ 自分の意志表明を書いた文書を一定の場所に提出する。
「A 候補に一票を入れる」「お気に入りの商品に札を入れる」

以上、「入 N する」の本動詞「入る」、「入れる」の意味について概観した。ここから、「入 N する」の意味は本動詞の意味より限定されていることが分かる。つまり、本動詞「入る」は基本的に①～⑧の意味で用いられるのに対し、「入 N する」はそのうちの①～⑤の意味に限定されている。また、本動詞「入れる」は基本的に①～⑦の意味で用いられるのに対し、「入 N する」はそのうちの①、②、⑥の意味に限定されている。本動詞「入る」、「入れる」の意味のうち、「入 N する」と対応する意味だけを示すと表 2 のようになる。

表 2 本動詞と「入 N する」の対応関係

	本動詞	入 N する
入る(自)	①外部からある場所の内部へ移動する。 例:「会場に入る」「教室に入る」「法廷に入る」 「神戸港に入る」「韓国に入る」「お城に入る」	入場する、入室する、 入廷する、入港する、 入国する、入城する
	②ある範囲に収まる。 例:「予選で 4 位に入る」「全国大会で 3 位に入る」	入賞する、入選する
	③ある集団や組織、分類に属する。 例:「会社に入る」「学会に入る」「野球部に入る」 「塾に入る」「自衛隊に入る」「球団に入る」	入会する、入社する、 入部する、入塾する、 入隊する、入団する
	④金や物、知らせなどが届く。 例:「口座に給料が入る」「店に新米が入る」「通報が入る」	入金する、入荷する、 入電する、入店する
	⑤物事が進行して、ある状態になる。 例:「カトリックに入る」「作業が最終段階に入る」	入信する、入道する、 入滅する、入寂する
入れる(他)	①ある場所や物の内部へ移動させる。 例:「手に入れる」「棺に入れる」「車を車庫に入れる」	入手する、入館する、 入庫する
	②金や物、知らせなどをある場所に届ける。 例:「家賃を指定口座に入れる」「店に品物を入れる」	入金する、入荷する
	⑥自分の意志表明を書いた文書を一定の場所に提出する。例:「A 候補に一票を入れる」「商品に札を入れる」	入札する

表2から分かるように、「入 N する」の中には「入金する」のように「入る」と「入れる」の両方の意味を持っているものもある。

以下、本動詞「入る」と「入れる」の意味を踏まえながら、「入 N する」の意味的・構文的特徴について詳しく考察する。

3. 「入 N する」の特徴

本節では、「入 N する」の意味的・構文的特徴について考察する。表1に示したように、「入 N する」は(i)内部構成要素の結合パターンによって大きくI類～IV類の4つに分けられる。また、(ii)外部構成によってさらに「入手類」、「入電類」、「入場類」、「入会類」、「入信類」、「入賞類」、「入札類」、「入金類」、「入庫類」の9つに分けられる。以下、それぞれのタイプの特徴について詳しく論じる。

3.1 I類:[Nが入る]

このタイプの「入 N する」は、内部構成において[N(移動物)が入る]という自動詞の意味関係で結合されており、外部構成においても自動詞用法として用いられる。I類に属するのは「入電類」の一種類のみである。

1)「入電類」

このタイプには「入電する」、「(専門店が)入店する¹⁾」などの動詞が挙げられる。

まず、(i)「入電類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成は[Nが入る]という自動詞の意味関係になっており、Nは(移動物)を表す。例えば、「入電する」は新しい電信や電報がある場所に入ることを表し、「入店する」は新しい店がある場所に入ることを表す。

次に、(ii)「入電類」の外部構成について見る。このタイプは主語のガ格に新しく入ってくるモノ(移動物)を取り、ニ格に(帰着点)を取る自動詞用法である。そのため、主語のガ格はニ格(帰着点)にとって新情報になる。例えば、「入電する」は(15)、(16)のように主語(「通報」、「新たな原稿」)がいずれもニ格(「消防局」、「報道部」)にとっての新情報を表

¹⁾ 「入店する」には、「専門店が入店する」のように「店がある場所に入る」という意味を表す場合と、「コンビニに入店する」のように「人が店に入る」という意味を表す場合の二通りがある。ここでは前者の場合を指す。なお、後者の場合は2)「入場類」で述べる。

す。また「入電する」の「電」(N)は、電話やファックス、電波などのような通信設備を通してニ格で示される場所に入ってくる情報を表す。

(15) 岡山、香川両県を結ぶ瀬戸大橋で起こった交通事故の通報が、福山地区消防組合消防局に入電することもあったという。(朝日朝刊 2000 年 09 月 04 日)

(16) 自宅に取り付けた押しボタンを押したり、携帯用のペンダント型装置を手で握ると、電波が電話回線を通して、タクシー会社側のパソコンに入電する仕組み。(朝日朝刊 1989 年 11 月 02 日)

同様に「入店する」も、(17)や(18)のようにガ格の主語(「100 を超える専門店」や「百円ショップ」)は、ニ格(「イオンモール広島祇園」や「ショッピングセンター」)にとつての新情報を表し、「入店する」の「店」の下位語を表す。

(17) 「イオンモール広島祇園」には、100 を超える専門店が入店する予定で、正社員、契約社員、パート、アルバイト合わせて約 1800 人の雇用を見込んでいるという。(朝日朝刊 2009 年 02 月 26 日)

(18) 「百円ショップが入店していると、ショッピングセンター全体の魅力が上がって、幅広いお客様を呼び込めるようになる」。(朝日夕刊 2003 年 10 月 17 日)

このように、「入電類」は外部構成において無意志自動詞の用法を持っており、(19b)-(22b)のようにヲ格目的語を取ることができない。

(19) a. 交通事故の通報が消防局に入電する。(自)

b. *交通事故の通報を消防局に入電する。(他)

(20) a. 電波がパソコンに入電する。(自)

b. *電波を報道部に入電する。(他)

(21) a. 100 を超える専門店が「イオンモール広島祇園」に入店する。(自)

b. *100 を超える専門店を「イオンモール広島祇園」に入店する。(他)

(22) a. 百円ショップがショッピングセンターに入店する。(自)

b. *百円ショップをショッピングセンターに入店する。(他)

3.2 II 類: [N に入る]

このタイプの「入Nする」は、内部構成においては[N(帰着点)に入る]という自動詞の意味関係で結合され、外部構成においても自動詞用法として用いられる。このタイプは N の性質によってさらに「入場類」、「入会類」、「入信類」、「入賞類」の 4 つに分けられる。

2) 「入場類」

まず、「入場類」について論じる。このタイプには「入場する」、「入港する」、「(コンビニに)入店する」、「入室する」、「入廷する」、「入城する」、「入館する」、「入構する」などの動詞が挙げられる。

はじめに、(i)「入場類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成は[N に入る]という意味関係になっており、N は物理的な場所としての〈帰着点〉を表す。例えば、「入場する」は会場や競技場に入ることを表し、「入港する」は港に入ることを表し、「(コンビニに)入店する」は店に入ることを表す。

次に、(ii)「入場類」の外部構成について見る。このタイプの外部構成は(23)–(25)のように二格を N'P として取る自動詞用法である。この場合、N'P は N の下位語(〈帰着点〉)を表し、主語は意図的に N(場所)の内部へ移動することを表すため、〈動作主〉であると同時に〈移動物〉でもある。

(23) 選手たちが 競技場に 入場した。
〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
(下位語) (上位語)

(24) 不審者が コンビニに 入店した。
〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
(下位語) (上位語)

(25) 貨物船が 東京港に 入港した。
〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
(下位語) (上位語)

このうち、(23)は主語の「選手たち」が外部から競技場の中に入ったことを表し、(24)は主語の「不審者」が外部からコンビニの中に入ったことを表す。また(25)は主語の「貨物船」が港という場所に入ったことを表す。このように、「入場類」の主語は〈移動物〉を表すと同時に〈動作主²⁾をも表す。主語は、(23)や(24)のように人間を表すのが普通であるが、(25)の「入港する」のように主語が乗り物(非意志体)を表す場合もある。ただ、乗り物と言っても「入場類」の場合は背後に操縦者が存在するため、(23)や(24)と同じく〈動作主〉の役割を果たすと考えられる。

²⁾ (25)の「貨物船」は意志のない乗り物であるが、操縦者の意志によって動かされるものであるため、(23)や(24)の人と同様に〈動作主〉として捉えられる。

3)「入会類」

次に、3)「入会類」について論じる。このタイプには「入会する」、「入隊する」、「入党する」、「入部する」、「入局する」、「入閣する」、「入学する」、「入院する」、「入社する」などが挙げられる。

はじめに、(i)「入会類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成は 2)「入場類」と同じく[N(帰着点)に入る]という意味関係で結合されているが、両者は N の性質において違いがある。つまり、「入場類」の N は具体的な場所を表しているのに対し、「入会類」の N は空間的な場所を表すのではなく、組織・機関を表す点で違いがある。すなわち、「入場する」はある物理的な場所に入ることを表し、「入会する」は「会」と呼ばれる組織に属することを表す点で異なる。

「入会類」の中には「入学する」のように N が具体的な場所を表すかのように思われるものがある。しかし、「入学する」と「学校に入る」は意味的に完全に一致するわけではない。両者の違いについて影山(1980:239-240)は、「学校に入る」は「極普通には(勉学のために)」という目的が含意されるが、しかし文脈によってはそれ以外の含意も可能である」と述べている。それに対し、「入学する」は「勉学という目的と、‘入学’に伴う一般的な手続きを必ず含意する」としている。

(26) a. のどが渴いた息子は水を飲むために学校に入った。

b. 泥棒は大時計を盗むために学校に入った。

(27) a. *のどが渴いた息子は水を飲むために入学した。

b. *泥棒は大時計を盗むために入学した。

(下線は引用者による。影山 1980:240)

つまり、「学校に入る」の「学校」は、組織および物理的な場所を表すことができるのに対し、「入学する」の「学」は組織しか表すことができないという違いがある。「入学する」と同じような性質を持つ動詞としては、ほかに「入院する」や「入社する」などがある。「入院する」は主体が治療・検査を受けるために所定の手続きを経て患者として病院に入ることであるが、「病院に入る」は必ずしも「入院」を意味するのではなく、患者としてではなくお見舞いや仕事などの別の用事で病院に入る場合にも用いられる。同じく、「入社する」は主体が採用されて所定の手続きを経て社員として会社に入ることであるが、「会社に入る」は必ずしも「入社」を意味するのではなく、社員としてではなくても見学などの別の用事で会社に入る場合にも用いられる。このように、「入会類」の N はいずれも具体的な場所としての意味では

なく、もっぱら組織の意味で用いられている。

次に、(ii)「入会類」の外部構成について見る。このタイプの外部構成は(28)–(30)のように二格をN'Pとして取る自動詞用法である。その場合、N'PはNの下位語(〈帰着点〉)を表し、主語は意図的にN(組織)の一員として自分自身の身分を変えることを表すため、〈動作主〉でもあり、〈移動物〉でもある。この点では2)の「入場類」と同様である。

- (28) 健二が 言語学会に 入会する。
 〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
 (下位語) (上位語)
- (29) 太郎が 自衛隊に 入隊する。
 〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
 (下位語) (上位語)
- (30) 次郎が 名門大学に 入学する。
 〈動作主・移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉
 (下位語) (上位語)

4)「入信類」

続いて、「入信類」について見る。このタイプは「入信する」、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」のように宗教関係の動詞が挙げられる。

まず、(i)「入信類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成も2)「入場類」や3)の「入会類」と同じく[N(帰着点)に入る]という意味関係で結合されているが、Nの性質がさらに抽象化している。「入場類」、「入会類」、「入信類」のいずれのNも〈帰着点〉を表すという点では共通しているが、「入場類」のNは物理的な場所における〈帰着点〉を表し、「入会類」のNは組織における〈帰着点〉を表す。それに対し、「入信類」のNはさらに抽象化が進んで、精神面における〈帰着点〉を表すものである。例えば、「入信する」はある宗教の信念を持ってその信仰の道に入ることを表す。また、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」は内部構成においてはそれぞれ禅定、滅土、寂滅に入ることを表し、いずれも仏教で高僧が死ぬことを表す。³

次に、(ii)「入信類」の外部構成について見る。このタイプの外部構成には、N'Pを取るものとN'Pを取らないものの二通りがある。N'Pを取るものは「入信する」という動詞のみで、

³ 「入定する」、「入滅する」、「入寂する」はいずれも仏教で高僧が死ぬことを表し、国語辞典の記述においても使い分けが見られない。ただし、新聞コーパスの実例を見ると、真言宗の開祖である空海の死に対しては「入定する」が多く用いられ、釈迦や他の高僧の死に対しては「入滅する」や「入寂する」が用いられている。このことから、同じ仏教用語でも「入定する」は真言宗の世界で用いられる言葉であるのに対し、「入滅する」や「入寂する」は仏教の宗派に関係なく用いられることが分かる。

(31)の「キリスト教に入信する」や(32)の「悪質な宗教団体に入信する」のようにN'Pに宗教を表すニ格を取ることができる。この場合、「入信する」のN'P(「キリスト教」、「悪質な宗教団体」)はN(「信仰」)を所有する組織であるため、N'PとNは「所有者—所有物」の関係にあると考えられる。

(31) 友人がキリスト教に入信した。

(32) 各大学とも、学生が悪質な宗教団体に入信して生活が破綻してしまうことへの警戒感を強める一方、信教の自由の関係から、規制のあり方に頭を悩ませているという。

(朝日朝刊 2009 年 05 月 11 日)

一方、「入信する」を除いたほかの動詞は(33)–(35)のようにいずれもN'Pを取らない。

(33) 高野山でもとりわけ静かな奥之院で、空海は入定したとされる。(週刊朝日 2012 年 09 月 28 日)

(34) NHK大河ドラマ「平清盛」にも登場する西行は、上皇のそば近くに仕える北面の武士でしたが、23 歳のとき身分を捨て出家しました。その後、京都や高野山、吉野、奥州、四国など各地を巡り、南河内のあるお寺で入滅しました。(朝日朝刊 2012 年 05 月 02 日)

(35) 数カ月後、良照は山陰地方のある寺院でひそかに入寂したとの報がもたらされた。(朝日朝刊 2002 年 11 月 22 日)

では、なぜ「入信類」の中には「入信する」のようにN'Pを取るものと、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」のようにN'Pを取らないものが存在するのか。その理由についてはそれぞれの内部構成の特徴から説明することができる。すなわち、「入信する」は「信仰に入る」という意味を表すが、どの宗教の信仰に入るのかが特定されていない。そのため、(31)の「キリスト教に入信する」や(32)の「悪質な宗教団体に入信する」のように信仰する宗教を表す成分、つまりN'PにNの所有者が要求されることは十分に想定できる。これに対し、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」はいずれもN(「定」、「滅」、「寂」)の所有者が特定しにくいいため、N'PにNの所有者が要求されないと考えられる。

5)「入賞類」

続いて、Ⅱ類の最後のタイプである「入賞類」について見る。このタイプには「入賞する」、「入選する」などの動詞が挙げられる。

まず、(i)「入賞類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成は[N(帰着点)に入

る]という無意志自動詞の意味関係で結合されており、N は選抜結果としての〈帰着点〉を表す。例えば、「入賞する」は賞を受ける順位内に入ることを表し、「入選する」は選考による合格ラインに入ることを表す。

次に、(ii)「入賞類」の外部構成について見る。「入賞類」の外部構成は(35)や(36)のようにN'Pにニ格補語を取って無意志自動詞用法として用いられる。この時、ニ格補語には、(35a)の「三位」や(36a)の「七位」のように順位を取ることもできれば、(35b)の「論文コンテスト」や(36b)の「全国コンクール」のように順位を決める競技会を取ることもできる。

- (35) a. 英語教師を目指す橋本さんは今秋、英語スピーチコンテスト県大会で三位に入賞した。(中日朝刊 2010 年 12 月 21 日)
- b. 市立向陽高校で、全国や県レベルの自然科学分野の論文コンテストに入賞する生徒が続出している。(中日朝刊 2010 年 10 月 28 日)
- (36) a. 同町の議会だよりは、昨年度の全国町村議会広報コンクールで七位に入選するなど評価が高い。(中日朝刊 2010 年 08 月 31 日)
- b. 守山市浮気町の子ども団体「ふけ町ふるさとクラブ」は十六日、同市役所を訪れ、手作りした地元の防災地図が全国コンクールに入選したことを山田亘宏市長らに報告した。(中日朝刊 2010 年 02 月 17 日)

「入賞類」のニ格に(35a)の「三位」や(36a)の「七位」のように順位を取る場合は、N の下位語を表すため、順位そのものに焦点が置かれている。それに対し、「入賞類」のニ格に(35b)の「論文コンテスト」や(36b)の「全国コンクール」のように競技会を取る場合は、いかなる内容のいかなる規模・レベルの競技会なのかに焦点が置かれている。

また、「入賞類」は入賞・入選した対象が作品の場合は二通りの主語で表すことができる。一つは、(37)のように応募した人(「太郎」)を主語とする場合であり、もう一つは(38)のように応募作品を主語とする場合である。

(37) 太郎が全国作文コンクールで 4 位に{入賞した／入選した}。

(38) 太郎の作文が全国コンクールで 4 位に{入賞した／入選した}。

3.3 Ⅲ類: [Nを入れる]

このタイプの「入 N する」は、内部構成においては[N(移動物)を入れる]という他動詞の意味関係で結合されており、外部構成においても他動詞用法として用いられる。「入 N する」の中でこのタイプに属するのは「入札類」の一種類のみである。

するのは7)「入手類」の一種類のみである。

7)「入手類」

このタイプには「入手する」が挙げられる。

まず、(i)内部構成について見る。「入手する」の内部構成は[手に入れる]という他動詞の意味関係になっており、Nは〈帰着点〉を表す。

次に、(ii)外部構成について見る。「入手する」の外部構成はヲ格目的語を取って他動詞用法として用いられる。例えば、(43)の「陶磁器を入手する」や(44)の「覚醒剤を入手する」のように具体物を自分の手に入れることを表す場合と、(45)の「カード情報」や(46)の「専門的な情報」などのような抽象物を取得することを表すこともできる。

- (43) 被災地の住民が、どんぶり会館発行の「陶磁器引換券」で陶磁器を入手した場合、会館側が代金を負担する仕組みだ。(朝日朝刊 2012 年 10 月 06 日)
- (44) 釜山日報は、職員は地元の暴力団関係者から覚醒剤を入手し、うち一人は勤務中に事務所内で使ったと報じた。(朝日朝刊 2012 年 09 月 27 日)
- (45) グループは二〇〇九年以降に同様の手口でカード情報を入手し、電子マネーや金券への換金、電子機器の購入などを繰り返したとされる。(東京朝刊 2011 年 07 月 26 日)
- (46) インターネットの普及で、皆が専門的な情報を入手しやすくなったことも研究を後押ししている。(朝日朝刊 2012 年 10 月 24 日)

さらに「入手する」は、(47)のように N'P(二格)を取らない点で他の「入 N する」と異なる。それは、「入手する」の主語は極秘情報を手に入れた〈動作主〉でもあり、極秘情報の〈帰着点〉でもあるからではないかと考えられる。

- (47) 記者が 極秘情報を (*自分の手に) 入手した。
〈動作主・帰着点〉 〈移動物〉 〈帰着点〉 〈帰着点〉

3.5 I 類+Ⅲ類

このタイプは、内部構成においては I 類の[N〈移動物〉が入る]という自動詞の意味関係とⅢ類の「N〈移動物〉を入れる」という他動詞の意味関係で結合されており、外部構成においても自動詞用法と他動詞用法を持つ。このタイプには 8)「入金類」がある。

8)「入金類」

このタイプには「入金する」、「入荷する」などの動詞が挙げられる。

まず、(i)「入金類」の内部構成について見る。このタイプの内部構成は、例えば、「入金する」は[金が入る]または[金を入れる]ことを表し、「入荷する」は[荷物が入る]または[荷物を入れる]ことを表す。このように、「入金類」は内部構成において(48)のようにⅠ類の[Nが入る]という自動詞の意味関係と、Ⅱ類の[Nを入れる]という他動詞の意味関係のどちらをも表すことができ、Nはいずれも〈移動物〉を表す。

(48) 「入金類」の内部構成の例:

Ⅰ類:[金が入る]・・・「金」は〈移動物〉

Ⅲ類:[金を入れる]・・・「金」は〈移動物〉

次に、(ii)「入金類」の外部構成について見る。このタイプの外部構成は(49)の「売上金が入金した」のような自動詞用法と(50)の「売上金を入金する」のような他動詞用法がある。

(49) 報告書によると、オクトは平成三年一月期に、それまで「売上金の相当部分が入金した段階」で売り上げとして計上していた経理の基準を変更。売上金が実際に入らなくても「契約が成立した段階」で計上するようにした。(中日夕刊 1996 年 06 月 27 日)

(50) 調べでは、石井店長は三―五日の連休中の売上金を入金するため、自転車で銀行へ向かう途中だった。(東京朝刊 2006 年 11 月 07 日)

同様に、「入荷する」も(53)の「黒川カボチャが入荷している」のような自動詞用法と(54)の「野菜を入荷する」のような他動詞用法を持つ。

(51) 宮崎から和種の黒皮カボチャが入荷している。精進料理に好まれ、薄味で煮るとおいしい。(中日朝刊 2008 年 10 月 25 日)

(52) 一方、西友の広報室も「今回のデータでは、安全かどうか判断する立場にない」とした上で、「今後の公的機関の調べを待って野菜を入荷するかどうか決めたい」として、現在も入荷を見合わせている。(東京朝刊 1999 年 02 月 10 日)

「入金類」の自動詞用法と他動詞用法の違いは、事態の動作主性と結果性に関わる問題である。つまり、(53a)、(54a)のように自動詞用法を用いた場合は、動作主を前面に出さないうで「入金」または「入荷」が完了したという結果に注目した表現となり、(53b)、(54b)のように他動詞用法を用いた場合は「入金」または「入荷」を行った動作主(「経理担当者」または「仕入れ担当者」)の行為に注目した表現となる。

- (53) a. 給料が入金した。
b. 経理担当者は社員の給料を指定口座に入金した。

- (54) a. 旬の野菜が入荷した。
b. 仕入れ担当者が旬の野菜を入荷した。

このように「入金類」は、他動詞用法の場合は「誰が N を入れた」という「誰」に焦点が置かれるのに対し、自動詞用法の場合は「N が入ったかどうか」に焦点が置かれ、動作主は誰でも構わない。

3.6 II 類+IV 類

このタイプは、内部構成において II 類の[N(帰着点)に入る]という自動詞の意味関係および IV 類の[N(帰着点)に入れる]という他動詞の意味関係で結合されたものである。外部構成においても自動詞用法と他動詞用法で用いられる。このタイプには「入庫類」がある。

9) 「入庫類」

この類には「入庫する」の 1 語しか見当たらない。

まず、「入庫する」の内部構成について見る。「入庫する」は内部構成において(55)のように II 類の[倉庫に入る]という自動詞の意味関係と IV 類の「倉庫に入れる」という他動詞の意味関係で結合されており、N は(帰着点)を表す。

(55) 「入庫する」の内部構成：

II 類：[車庫に入る]・・・「庫」は(帰着点)

IV 類：[車庫に入れる]・・・「庫」は(帰着点)

次に「入庫する」の外部構成について見る。「入庫する」の外部構成は(56)の「乗用車が地下駐車場に入庫する」のような自動詞用法と(57)の「組合員が指定工場に車を入庫する」のような他動詞用法の二つがある。

(56) 下釜さんの乗用車が同9日午前中に名古屋市中村区の地下駐車場に入庫し、下釜さんの知人が撤去するまで放置されていたことが判明。横山容疑者は「駐車場に車を止めたのは自分」とも話しているという。(朝日朝刊 2009 年 12 月 07 日)

(57) 「地球健康車検」では、組合員が指定工場に車を入庫すると 100 ポイント、車検を実施すると 60 ポイントを提供する。(朝日朝刊 2007 年 09 月 23 日)

また「入庫する」は、(58a)と(58b)のように自動詞用法の主語が他動詞用法の目的語に対応することから、両者は自他対応を成すことが分かる。

(58) a. 乗用車が地下駐車場に入庫した。

b. 運転手が乗用車を地下駐車場に入庫した。

さらに、「入庫する」は(59)の「運転手がバスを入庫させる」や(60)の「社員が電車を入庫させる」のように「自動詞+させる」という使役形で他動詞の意味を表すこともできる。

(59) 運転手は終点で男性客に気づかず、逗子駅へ折り返して運行。新しい乗客もいなかったため、翌13日午前0時35分ごろ、バスを営業所の車庫に入庫させ、乗降口を閉めた。(朝日朝刊 2005 年 01 月 26 日)

(60) この社員は七月八日午前零時三十八分ごろ、住之江車庫に回送電車(六両編成)を入庫させる際、(後略)(朝日朝刊 2000 年 11 月 11 日)

このように「入庫する」が自動詞の使役形で他動詞の意味を表す用法は、ほかの「入Nする」には見られない現象である。

4. 「入Nする」のまとめ

本研究では、「入Nする」の意味的・構文的特徴について、(i)内部構成、(ii)外部構成、(iii)N'PとNの意味関係の3つの側面から分析した。その結果をまとめると表3のようになる。

表3 「入Nする」の諸特徴

		N'Pを取らない	N'Pを取る							
		入手類	入電類	入場類	入会類	入信類	入賞類	入札類	入金類	入庫類
(i) Nの特徴	〈移動物〉	×	○	×	×	×	×	○	○	×
	〈帰着点〉	○	×	○	○	○	○	×	×	○
(ii) N'Pの特徴	〈移動物〉	×	○	×	×	×	×	○	○	×
	〈帰着点〉	×	×	○	○	△ ^注	○	×	×	○
(iii) N'PとNの 関係	下位語 - 上位語	×	○	○	○	×	○	○	○	○
	所属先 - 所属物	×	×	×	×	×	○	×	×	×
	所有者 - 所有物	×	×	×	×	○	×	×	×	×

注:「入信類」には「キリスト教に入信する」の「入信する」のようにN'Pを取るものと、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」のようにN'Pを取らないものがある。

「入Nする」の意味的・構文的特徴をまとめると以下のようになる。

I 類:[N<移動物>が入る](自)

1)「入電類」:(「入電する」、「(専門店が)入店する」)

《意味》:新しい物(N)が外部から内部へ入ってくる。

《構文》:[物(Nの下位語)]が入Nする(自)

II 類:[N<帰着点>に入る](自)

2)「入場類」:

(「入場する」、「入港する」、「(コンビニに)入店する」、「入廷する」、「入城する」)

《意味》:人や乗り物がある場所(N)の中に入ってくる。

《構文》:[人・乗り物]が[場所(Nの下位語)]に入Nする(自)

3)「入会類」:

(「入会する」、「入隊する」、「入閣する」、「入学する」、「入院する」、「入社する」など)

《意味》:人がある組織(N)の一員になる。

《構文》:[人]が[組織(Nの下位語)]に入Nする(自)

4)「入信類」:(「入信する」、「入定する」、「入滅する」、「入寂する」など)

《意味》:宗教用語で、人がある境地(N)になる。

《構文 a》:[人]が[宗教団体(Nの所有者)]に入信する(自)

《構文 b》:[高僧]が入Nする

5)「入賞類」:(「入賞する」、「入選する」など)

《意味》:作品が賞を受ける順位内(N)に入る。

《構文》:[人・作品]が([競技会]で)[順位(Nの下位語)]に入Nする(自)

III 類:[N<移動物>を入れる](他)

6)「入札類」:(「入札する」、「入稿する」など)

《意味》:主体が希望額・原稿(N)を提出する。

《構文 a》:[人]が[商品]に[希望額(Nの下位語)]を入札する(他)

《構文 b》:[人]が[納入先]に[原稿(Nの下位語)]を入稿する(他)

IV 類:[N<帰着点>に入れる](他)

7)「入手類」:(「入手する」)

《意味》:ある物や情報を手(N)に入れる。

《構文》:[人・組織]が[物・情報]を入手する(他)

I 類+Ⅲ類

- 8)「入金類」:(「入金する」、「入荷する」など)
《意味 a》:金や商品(N)がある場所に入る。
《構文 a》:[金・商品]が([場所]に)入Nする(自)
《意味 b》:金や商品のある場所に入れる。
《構文 b》:[人・組織]が([場所]に)[金・商品]を入Nする(他)

Ⅱ類+Ⅳ類

- 9)「入庫類」:(「入庫する」)
《意味 a》:乗り物が車庫(N)に入る。
《構文 a》:[乗用車]が[車庫(Nの下位語)]に入庫する(自)
《意味 b》:人が乗り物を車庫に入れる。
《構文 b》:[人]が[乗り物]を[車庫(Nの下位語)]に入庫する(他)

[参考文献]

- 影山太郎(1980)『日英比較 語彙の構造』松柏社
小林英樹(2001)「動詞的要素と名詞的要素で構成される二字漢語動名詞に関する再考」
『現代日本語研究』8, pp.75-95
小林英樹(2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
張 善実(2011)「漢語サ変動詞「受 N する」の意味と構文—「N を受ける」との比較から」
『ことばの科学』24, pp.61-80
張 善実(2013a)「漢語サ変動詞「除 N する」の意味と構文」『言葉と文化』14, pp.19-35
張 善実(2013b)『日本語の V-N 型漢語動詞の語構成論的研究—離脱・帰着を表す動詞
を中心に—』博士学位論文, 名古屋大学
張 善実(2013c)「漢語サ変動詞「離 N する」の意味と構文」『ことばの科学』26, pp.133-152
張 善実(2016)「漢語サ変動詞「着 N する」の意味と構文」『ことばの科学』30, pp. 59-78
張 善実(2017)「漢語サ変動詞「脱 N する」の意味と構文」『ことばの科学』31, pp. 59-78